ISSN　0582−4478

京都大学附属図書館報

静脩

2001年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 37,　No. 4

フォン・シーボルトと『ファウナ・ヤポニカ』

田　隅　本　生

最近、京都大学附属図書館の電子図書館システムに西洋の古典『ファウナ・ヤポニカ』、いわゆる「日本動物誌」が収録されたよしで、同システムとその利用者のためにひとまず祝意を表したい。この機会に、当の書物の輪郭と背景を簡単にご紹介しよう。

昨年、西暦 2000 年は、在日オランダ大使館と日本文部省などの企画で“オランダ年”とされ、同国をめぐる何百という催しが全国各地で行われた。遠い昔の1598年６月、５隻のオランダ帆船団が東洋を目ざして同国から出帆し、西回りで航海した。その結果、ただ１隻「リーフデ号」(De Liefde ＝愛)だけが乗組員の８割近くを途中で失いながら、かろうじて豊後の海岸（大分県臼杵市）にたどり着いた。1600年４月のことで、これが日本とオランダの最初の出会いであった。天下分け目、関ヶ原の戦いの５か月前の出来事である。

広く知られているとおり、同船の英国人航海士ウィリアム・アダムズ（三浦按針）や船員ヤン・ヨーステン（東京、八重洲の語源）らが発足当初の江戸幕政に与えた影響をはじめ、この船の来着が日本の近代化を刺激した効果の大きさは測り知れない。

“オランダ年”は、この画期的な出来事から数えた日本オランダ修好 400年を記念するものだった。無数の行事のなかには、長崎と東京の公立博物館で開かれた大規模な記念展覧会（長崎では「大出島展」）もあった。そこでは、フォン・シーボルトの膨大な収集品の一部がオランダからほぼ 170年ぶりに里帰りし、国内所蔵の関係物品とともに合計 450点も展示されて、来観者に強い感銘を与えた。それより前、1988年にも日蘭修好 380年（オランダ商館平戸開設からの年数）を記念した展覧会「シーボルトと日本」が京都、名古屋、東京の三つの国公立博物館で開かれたことがある。これは、シーボルト収集の人工物や天産物が日本国内で展観された最初の催しであった。

さて、フィーリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Ph. Fr. von Siebold)は一言でいえばドイツ出身の医者だったが、到底それだけにとどまる人ではなかった。念のためフォン・シーボルトの公的経歴を復習してみると、彼はフランス革命進展中の1796年、ドイツはバイエルンのヴュルツブルクで出生。同地の大学で医学を修めたのちオランダ国王の侍医になる。が、東洋への興味を抑えがたく、同国陸軍の軍医に転じ、1823年、オランダ領東インド（現インドネシア）

『ファウナ・ヤポニカ』の4巻セット（京大理学部動物学教室所蔵）

の中心地ジャワ島のバタヴィア（現ジャカルタ）へ渡航。たまたま好機があって移動、同23年中に長崎に到着し、出島のオランダ東インド会社商館に医員として勤務。26年には５か月間、商館長に随行して江戸幕府へ参上。ところが、28年帰国する際に起きた“シーボルト事件”のため幕府から国外追放の処分をうけ、翌29年ヨーロッパへ退去。やがて国際情勢の変化による追放解除にともない、59年子息とともに再び長崎へ来航して滞在し、62年、追加の仕事を終えて帰国。第二次日本旅行で入手した資料を整理していた1866年、フォン・シーボルトは故国のミュンヘンで死去、享年70歳。明治元年の２年前のことだった。

こうした表向きの略歴には、シーボルト事件の汚点のほかには特に注目すべきものはない。開国まで200年以上も存続した出島のオランダ商館にはたぶん多数の医師が交代で勤務しただろう。まれには動植物の採集で知られる人もいた。そのなかでシーボルトが抜群によく記憶されているのは、彼が商館員のための医療業務のかたわら、６年ほどの短い滞在期間中に大量の吸収と寄与をした、量質ともに信じがたいような“副業”のためである。

彼の副業には大きく分けて二つの要素があったと言える。その一つは、彼が日本人へのサービスに意欲的だったこと。一般患者の診察のほか、名声を聞いて遠近から集まってきた門人へ蘭学、つまりオランダ語、西洋医学、科学全般などの講義を毎週１回行ったこと、天然痘予防の“種痘法”を日本人に初めて教えたこと、などが伝えられている。シーボルトは出島着任の翌年、長崎奉行から特別の許可を得て郊外の鳴滝に学塾兼診療所「鳴滝塾」を開設し、そこでこれらの仕事に当たった。この塾は蘭学の重要な拠点になり、高野長英ら50人を超える蘭学者や通詞を育てたと言われている。

副業のもう一つの要素は、日本のあらゆる分野にわたる人工産物と、天産物つまり動植物の標本をできるかぎり収集し、それらを何度にもわたって本国へ送ったこと。そうした物品の輸送だけに一隻の船が当てられたこともあったという。ただし、シーボルト自身が駆けまわって物を入手したのではなく、彼が診察費を受け取らなかったため患者側が自発的に物品を贈ったのだとも言われる。天産物の収集と発送には、ドイツ人薬剤師兼助手の H. ビュルガー、生物・人物・風景などの写生にはビュルガー自身と、シーボルトが頼りにした有能な洋風絵師、川原慶賀の貢献が大きかった。とくに慶賀の作品は数が非常に多く、シーボルトの偉業は彼らの協力の上に成り立っていた。

受け入れ側のオランダでは、アジアから大量の民俗的・博物学的な品物が続々と到着するのに押され、同国最古の大学があるライデン（レイデン）に国立民族学博物館が設立された。シ

ーボルトの日本文物はまとめてそこに収蔵されることとなり、これらは後年、彼が帰欧後に執筆・出版した大著『NIPPON』（後述）の裏付け資料になった。

他方、おびただしい日本産動物の標本はすべて、同市内に以前からあった国立自然史博物館に納められた。近年、シーボルトらの動物標本の調査に携わっている甲殻類専門家の山口隆男氏（熊本大学）は、彼らの収集物に三つの特色を認めている。①一つの種類について幼体から成体まで手に入るかぎりなんでも集めたこと、②日本語名を各種ごとによく記録し、種類によってアイヌ語名も調べたこと、③珍奇な種類を重視するのではなく、平凡な種類も平等に集めたこと。これらは本来、学術的博物館のコレクションが満たすべき基本条件であると言える。こうして、ライデンの二つの国立博物館は、江戸時代後期の日本の状況を物質面で集中的に保存する宝庫になり、その整理や研究は今なお十分には終わっていないよしである。

さて、シーボルトが本国へ送った動物標本はアルコール漬けのもの、乾燥した毛皮や剥製、さらした骨や組み立てた骨格などであった。これらを受け取った当時の自然史博物館長 C. J. テミンクは動物分類の専門家で、この人を中心とする３名の動物学者（下記）が日本標本の調査に当たった。そして、シーボルトが帰欧した後の1833年より研究成果の刊行がアムステルダムで始められ、1850年まで続けられた。これらの出版物の総タイトルが『ファウナ・ヤポニカ』（FAUNA JAPONICA＝日本の動物相）である。

この書物（以下、FJと略す）は「日本動物誌」とも呼ばれるが、この日本語名は通称であって正式の書名ではない。邦訳書はむろん存在しない。また「シーボルト」の名が冠せられることも多いが、彼は標本の収集、データ記録、発送、研究委託などをした責任者であって、著者ではない。シーボルトは動植物に強い興味と知識をもっていたにしても、博物学的な鑑別、分類、命名などの専門家ではなかった。

ところで、多数の分冊でできたFJは、実はとてつもない本なのである。まず人を驚かすのはその判サイズで、各ページの大きさは縦 370ミリ、横 295ミリもある。用紙（劣化を生じていない）にも相応の厚みがある。平均すると25ページ程度のこうした分冊が17年間にもわたってぱらぱらと刊行され、結局42分冊、本文だけで合計 1,057ページになった。そして本文頁の間に、カラー写真も及ばないほど精緻で大きな各動物の写生石版画（単色 92、彩色 311）が挿入されている。その多くは上記の絵師、川原慶賀の作だとされるが、西洋人の署名の見える図もある。全体としてFJは動物図鑑の最初かつ超特級の手本だったのであり、美術的な画集と言ってもよいほどのものである。

このようにばらばらな形で出版された書物は当然、完全本にはなりにくい。運よく全ての分冊が揃った場合には、少数の巻にまとめて頑丈に製本され、分割不可のセットとされるのが普通であったらしい。わが国では、国立国会図書館にやや外装の傷んだ５巻セットが収蔵されており、京都大学には４巻セットとして保存されている（1907年、医・生理で受入、22年、理・動物へ移管）。昔、おそらくヨーロッパで造られた合本が古書として購入されたものと推定される。

ちなみに、国会図書館本に基づいた極めて忠実な復刻版が附属の解説書１巻（酒井ら５氏の分担執筆）とともに、1976年に部数限定で出版されたことがある（講談社）。

『ファウナ・ヤポニカ』の分冊はもとは大きなペーパーバックであった。京都大学本を見ると、合本の際に剥がされた各分冊の表紙が何枚もまとめて合本の巻末に綴じこまれている。表紙の次のトビラは現今と同じく書物全体を代表するもので、文字の背景に、十二支の動物や、麒麟など５種の瑞祥動物を表した極めて東洋的な絵図がある。そこに、次のような書名と副題

がちりばめられている（すべてラテン語）。

ファウナ・ヤポニカ
すなはち
至高なるオランダ東インド帝国領を領有せる
上官諸氏の命令と後援により企画されたる
日本旅行において1823－1830年に収集し、
注釈、観察記録、及び素描により
解説したる　諸動物の記録

中央には“Ph. Fr. de［= von］Siebold”の大きな装飾文字があり、次に C. J.テミンクと H. シュレーゲル（脊椎動物担当）、および W. ド＝ハーン（無脊椎動物担当）の共同研究により完成されたことが明記されている。下部には“奥付”がある。

国王の援助により出版さる
オランダのライデンにて
1833年
アムステルダム　J. ミュラー社にて
（刊行年は分冊により異なる）

また各巻頭には、当時の西洋学界の気風を暗示する全頁の大きな献辞が置かれている。

至高なるオランダ東インド帝国領を
統治せる　卓抜にして著名なる
諸氏へ、また　オランダに
栄ゆる　芸術と科学の
諸協会へ　捧げらる

さて、肝心の内容のことだが、京都大学所蔵の４巻本セットは無脊椎動物の１巻「甲殻類」と、脊椎動物の３巻「哺乳類・爬虫類」「鳥類」「魚類」から成っている。ここでいう“爬虫類”は旧式の分類方式によるもので、現今の“両生類”の全てを含んでいる。当時はダーウィン流進化論が確立するより30年以上も前であり、生物の分類は系統関係を問題にせずに形式的な類別や命名を事とするものだった。他方、ド=ハーンによる無脊椎動物の巻はフランス語の長い序論を除いて全部ラテン語、テミンク／シュレーゲル執筆のその他の３巻はすべてフランス語で書かれている。当時、学術的な文書はまだ昔ふうに権威ある共通語だったラテン語（または仏語）で書かれることがあり、今日ではほとんど読解不能になっているのは誠に惜しいことである。

限りなく多様な無脊椎動物に関して、FJで取り扱われたのは甲殻類だけである。著者のド=ハーンは執筆の途中で病没し、後継者がいなかったからだと言われている。難解なこの巻は別として、その他の巻での種類の取り扱いはほぼ同様らしい。多くの動物が近似の種類ごとに次々に列挙され、まず外形の特徴が描写され、シーボルト自身の記録などに基づいた関連事情が述べられる。そして、未知の新種と判断されたものには、“二名法”によってラテン語式の新しい種名がつけられた。

哺乳類の部を例にとれば、所載の陸産種は54種で、そのうち記述のみは26、付図を伴う記述は28ある。いま日本産として知られている 120余種には後年の研究により種名が変えられたものが多いが、13種はシーボルト標本に基づいてテミンクまたはシュレーゲルが初めて与えた名をそのまま、もしくは一部を維持している。例えば、日本で強く関心がもたれる“ヤマイヌ”（Jama-inu、いわゆるニホンオオカミ）は、テミンクがシーボルト由来の剥製と骨格に基づいてFJより前にある学術誌でオランダ語で発表し、大陸産オオカミ *Canis lupus* とは別種として“*Canis hodophilax*”と命名していたものだ。幻の動物であるだけに異説があるけれども、この種名は今も有効とみられている。テミンクはFJでこう書いている。「新種の野生の犬、すなわち日本人がヤマイヌと呼んでいるものは、全体の形でも毛並みの特徴でも、生活様式でも、欧州諸国の狼と比較しうるものである。……日本の狼は欧州の狼より小さいのみならず、立ったとき、体長に比べての体高が欧州の狼より小さい。……」この箇所には、剥製によく似た全頁大の全形彩色図が付けられている。

ちなみに、“ヤマイヌ”の剥製と頭骨は日本人にとって、ライデンの自然史博物館標本のなかでは最も気がかりなもので、戦前以来幾人も

の研究者やジャーナリストが現地を訪れてこれらを直接調査している。その剥製は1988年の日蘭修好記念展の際に日本へ里帰りして２か所の博物館で展示され、参観者に強烈な印象を与えた。このように、最初の命名の基になった掛け替えのない“基準標本（タイプ）”がライデンの自然史博物館には数多く保存されており、FJで記述されて今も生きている多くの種名がそれらと緊密に結びついているのである。

しかし他方、彼の本当の興味は日本の人文的な諸要素に向いていたように思われる。彼が弱冠30歳前後の数年間に蓄積した資料に基づき、帰国後にドイツ語で執筆出版した大著『日本　日本とその隣国、保護国 ── 蝦夷・南千島・樺太・朝鮮・琉球列島 ── の記録集．日本とヨーロッパの文書および自己の観察による』（1832－51、ライデン）は、“江戸後期日本のすべて”ともいうべき畢生の集大成である（有名な既訳書『江戸参府紀行』はその中の一章）。先年これが９巻本（1977－79、雄松堂）として全訳出版されたのは実に有意義なことであった。これまで、シーボルトをめぐる無数の研究のほとんどがこうした民族学的な面に向けられてきたが、それは不当なことではない。しかし、この名著もその背景をなす膨大な物品も、過去の世界を記録した歴史的資料以上のものではない。事実誤認もあっただろう。

それとは質を異にして、『ファウナ・ヤポニカ』とシーボルトが集めた動物標本は単なる文化遺産にとどまらず、ある意味では今でも“生きて”いる。ちょうど我々の本籍地のように、日本人研究者をそこへ回帰させるのだ。生物はすべて時代とともに進化し変形するものだが、現在の生物はまだシーボルトの時代から変わっていない。彼自身の意図とは関わりなく、日本産の現存動物を研究する人には、場合により、国際動物命名規約（新版が2000年１月発効）に従って、FJの記載やライデンの基準標本を調べる必要が生ずるのである。

それはともかく、シーボルトと協力者らが当時の厳しい環境条件を突破してなしとげた仕事は、凡人の常識をはるかに超えるものである。仮に現代において、このような人物がもろもろの情報技術や電子図書館を駆使するとすれば、結果はどうなるだろうか。── この人の生涯と事績を見つめるとき、今さらのように一個人の力の偉大さを思わずにはいられない。

（たすみ　もとお：元理学部助教授）

附属図書館公開展示会について（予告）
── 京都古地図など ──

平成13年度附属図書館公開展示会は昨年寄贈を受けた『大塚京都図コレクション』の中から京都古地図を展示します。展示は総合博物館新館オープニングにあわせて、同企画展示室で開催します。

期間　：　平成13年６月１日（金）～６月30日（土）
休館　：　月曜日
場所　：　総合博物館　企画展示室（２階）

なお、開催期間中に文学研究科金田章裕教授による記念講演会を予定しています。